

## 第2章 生活での基本意識 — 個人志向の動向 —

### 2.1 生活を貫く「個人」の視点

まず最初に、人々の生活全般における最も根幹的な意識、生活での態度を決定する際に基本となっている意識を取り上げる。そうした意識があるならば、どういう意識の軸があり、どのような変化を見せているかということである。この基本意識は、本稿でこのあと取り上げるような各生活局面での意識や行動と大きく関連していると考えられる。

最初に、生活全般についての基本的意識に関して、各調査を見てみよう。

#### (1) 生活価値観 — 大人主義、自分中心主義 —

(財)生命保険文化センターが行っている「日本人の生活価値観調査」は、日本人の主な価値観を把握することを目的とした調査で、これまで1976年、85年、91年の3回実施されている。

最新の91年の調査では、「あまり何でも自由になると人間がだめになる」というような生活の各局面に関する81の質問に対して因子分析の手法を用いることにより、2つの上位階層の因子（価値観）と5つの下位階層の因子を、価値観を説明する因子として抽出した。この2つの上位階層の因子は、まず一つが「社会の一員としての自覚と責任をもって行動し、家庭にあつては堅実な態度で望む、いわゆる優等性的な」意見が代表的であることから「大人主義」と名付けられ、もう一つは「自分のやりたいことを束縛されずにやりたいという個人生活を重視する」意見項目により構成されていることから「自分中心主義」と名付けられている。

注) 詳細は「日本人の生活価値観～1991」を参照願いたい。尚、本章の5節に構造図を示してあるので、そちらも参照願いたい。

#### (2) 人のくらし方

次に、国民性調査の次の設問を見ていこう。

- 人のくらし方には、いろいろあるでしょうが、つぎにあげるもののうちで、どれが1番、あなた自身の気持に近いものですか？
- ・一生けんめい働き、金持ちになること
  - ・まじめに勉強して、名をあげること
  - ・金や名誉を考えずに、自分の趣味にあつたくらし方をすること
  - ・その日その日を、のんきにクヨクヨしないでくらすこと
  - ・世の中の正しくないことを押しつけて、どこまでも清く正しくくらすこと
  - ・自分の一身のことを考えずに、社会のためにすべてを捧げてくらすこと

注) 以下、枠内の○は設問文を、・は選択肢を表す。選択肢のうち、「その他」「わからない」「無回答」などは、適宜省略している。また、四捨五入の関係で選択肢の合計が100%とならない場合もある。

図2-1 人のくらし方

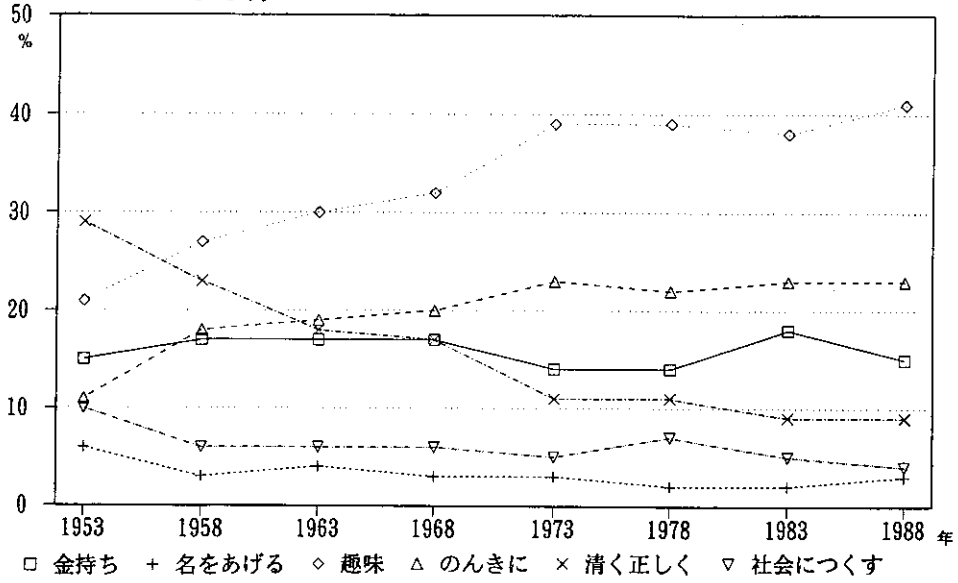
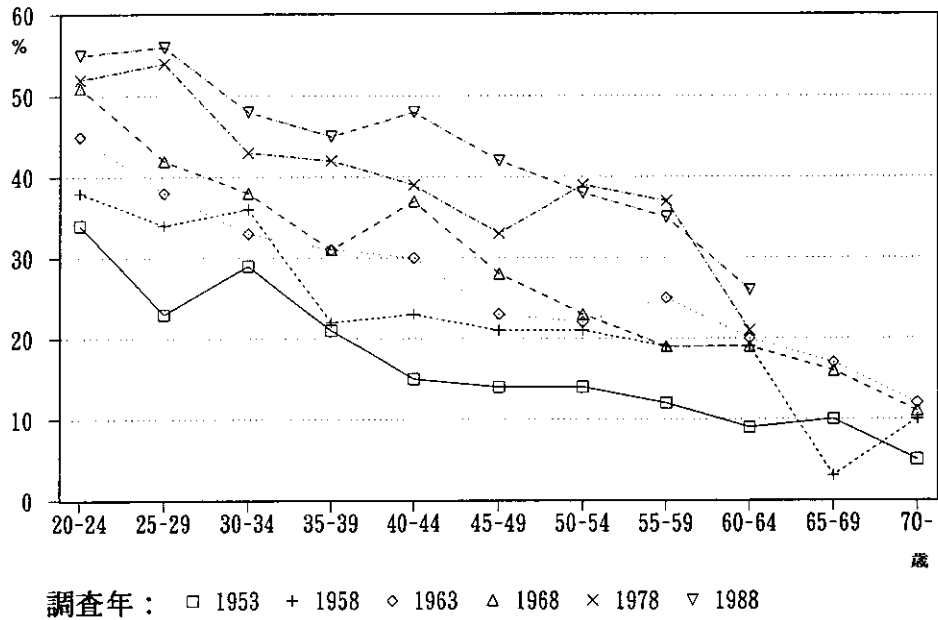
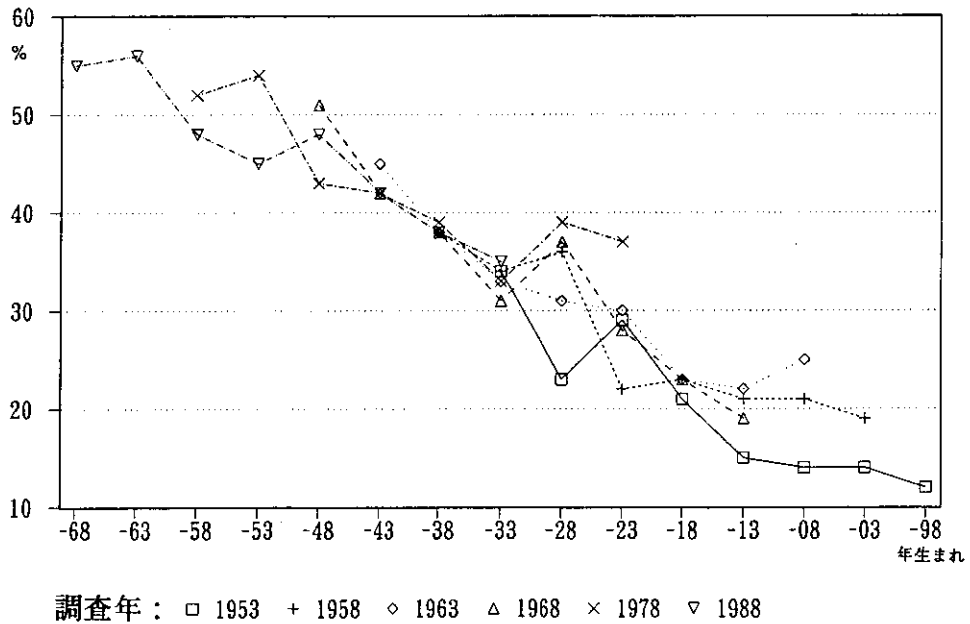


図2-2 趣味にあつたくらし方：年齢別



調査年： □ 1953 + 1958 ◇ 1963 △ 1968 × 1978 ▽ 1988

図2-3 趣味にあつたくらし方：生年別



調査年： □ 1953 + 1958 ◇ 1963 △ 1968 × 1978 ▽ 1988

この設問は1953年より5年ごとに行われており、戦後の生活に関連した意識の動向をこの回答から読み取ることができる。各選択肢の増減を見ると、1970年代にかけて「趣味にあった」くらし方がかなりの勢いで増加しており、その一方で「清く正しく」「社会につくす」というものが減少した。最近はほとんど変化がなく安定している（図2-1）。また、「趣味にあった」の変化を年齢別、生年別に調査時点を追って見ると（図2-2、図2-3）、生年別で見た場合の各生年層が時系列的に極めて安定していることが特徴的である。

### (3) 生活目標

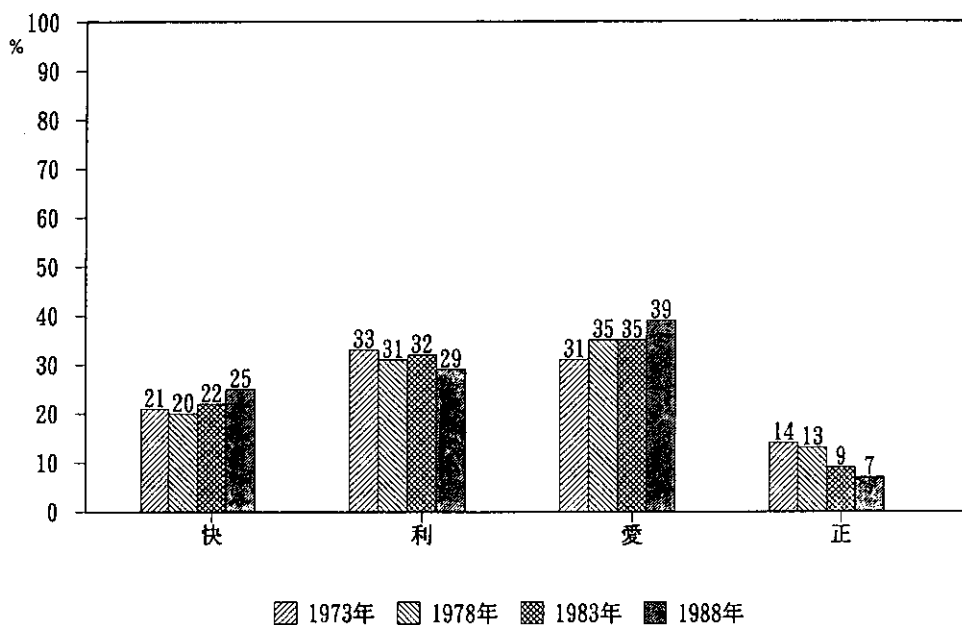
1970年代以降の生活全般の意識を探るものとして、日本人の意識調査のなかに、生活目標を4つのなかから近いものを選ばせる設問がある。これは、「現在か未来か」という軸と、「自己か社会か」という軸の二つの基本軸によって構成した回答群である。

○人によって生活の目標もいろいろですが、リストのように分けると、あなたの生活目標にいちばん近いのはどれですか。

- |                       |               |       |
|-----------------------|---------------|-------|
| ・その日その日を、自由楽しく過ごす     | <快> = (現在、自己) | <>は略称 |
| ・しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く | <利> = (未来、自己) |       |
| ・身近な人たちとなごやかな毎を送る     | <愛> = (現在、社会) |       |
| ・みんなと力を合わせて、世の中をよくする  | <正> = (未来、社会) |       |

1973年から88年にかけて、<快>と<愛>が増加、<利>と<正>が減少しており、現在対未来の軸で見ると、現在中心の志向が増加している。一方、自己対社会の志向についてはほとんど変化はない（図2-4）。

図2-4 生活目標



以上、3つの基本的ともいべき調査を概観したが、これらを貫いているのは、生活の中での「個人」あるいは「自己」という視点である。調査(2)での「趣味にあつた暮らし方」の1970年代にかけての増加とその後の安定は、調査(3)での自己対社会の軸の安定性とも重ねると、経済成長による「個人」を軸とした考え方の増加と定着とを読み取ることができ、これが現在の調査(1)での「自分中心主義」につながる事となるのである。

こういったデータの外に目を向けると、日本社会の特徴として、社会規範や国民性としての集団主義が強調されているものが多い。他の国家や民族と日本(人)を比較した議論では、必ずといって良いほど、集団主義というものに触れている。こうした集団主義として指摘されているものは、一言で言えば、日本には欧米的な自我という発想が薄く、個人よりも集団という単位で社会を構成しているという点であろう。

この集団主義と、上記の「個人」の視点とを合わせて考えると、日本社会の集団性と、「個人」を軸とした意識の定着との関係は、日本人の最も根本的な意識をみる上での一つと考えられる。そして、この日本社会の集団主義という特質は変動する可能性も強いことから、今後の意識を見るうえでも重要なものである。

注) 日本人論、日本論の代表的なものとして、中根千枝氏の「タテ社会」論、土居健郎氏の「甘え」論、浜口恵俊氏の「間人主義」などがある(巻末の文献を参照)。

こうした問題意識から、本研究では、生活での基本意識として、まずはこの「個人を軸とした考え方=個人志向」という視点から検討を始めることとする。そこでの個人志向には色々な意味のものが考えられるが、最も幅広く、個人というものを重視するあらゆる態度を総称したものとして捉えておきたい。なお、以下では、「個人志向」とともに「個人重視」、「個人主義」という表現でこうした態度を呼称するが、個人を重視する思想的な側面を強調する場合に「個人主義」という表現を用いるものの、多くはほぼ同じ意味として使用している。

## 2.2 個人志向の推移：国や社会

個人志向、あるいは個人主義といっても、各個人の意見や行動によりそれを見通すことのできる場面はさまざまであつて、個人が重視されるという態度も、どのような具体的局面に関するものであるかによって異なるものである。まず最初に、国や社会という、最も「個人」からは離れた場面、対象において、個人と比較した調査を検討することとする。

### (4) 日本と個人の幸福

国民性調査に、日本と個人とを対象にした設問がある。

○あなたはつぎの意見の、どちらに賛成ですか。1つだけあげてください？

- ・個人が幸福になって、はじめて日本全体がよくなる (個人が優先)
- ・日本がよくなって、はじめて個人が幸福になる (日本が優先)
- ・日本がよくなることも、個人が幸福になることも同じである (同じくらい)

この回答の1953年からの経年比較をみると、「個人が優先」が一定であるのに対して、「日本が優先」が減少してきており、個人志向への強力な移行とまでは言えないものの、ゆるやかな個人重視への方向性が見いだせる（図2-5）。

この「日本が優先」の変化を、生年別に見ると、戦後世代を中心として、過去20年程はほとんど変化せず、しかも最近の世代において支持されなくなってきたことがはっきりする。これは(2)の設問と同様の傾向である（図2-6）。

図2-5 日本と個人の幸福

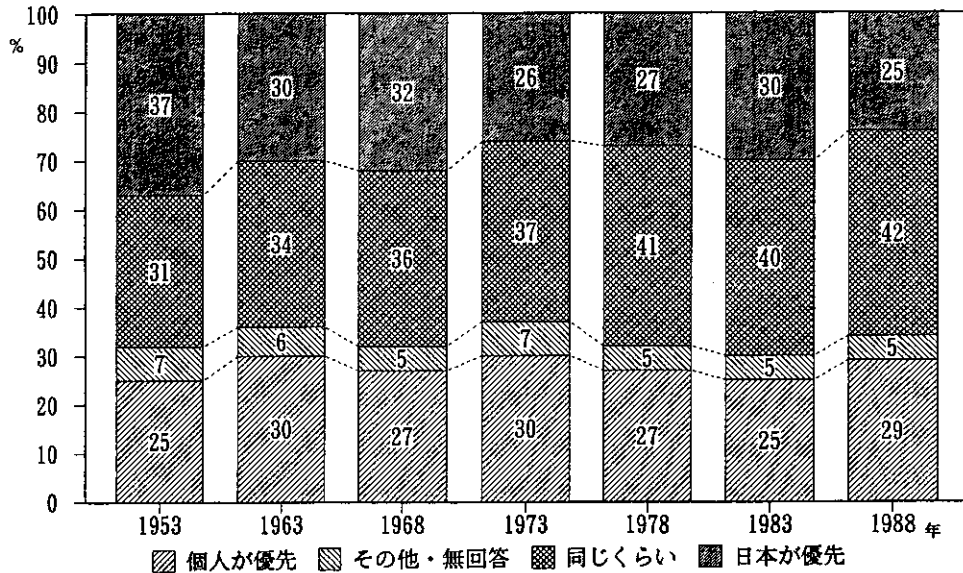
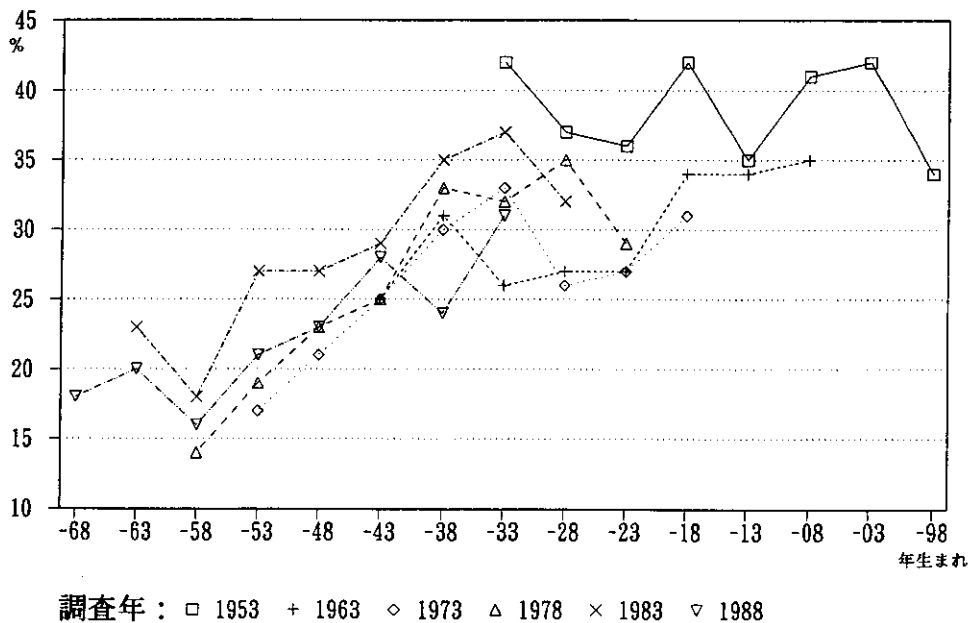


図2-6 日本と個人の幸福；「日本が優先」：生年別



(5) 好きなことか人のためか

さらに国民性調査では、次のような暮らし方に関する設問がある。

○あなたは、つぎの2つの暮らし方のうち、どちらに賛成ですか？

- ・人のためにはならなくても、自分の好きなことをしたい
- ・自分の好きなことかどうかはともかく、人のためになることをしたい

ここでは、「好きなことをしたい」という自己重視のものが増加し、「人のためになることをしたい」という広く社会的なことのためという考え方は減少してきており、これも同様の結果となっている（図2-7）。

(6) 日本のために役に立ちたいか

日本人の意識調査にも、次のような日本や日本人について行った設問がある。

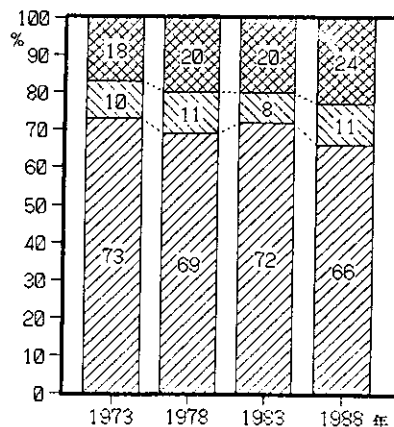
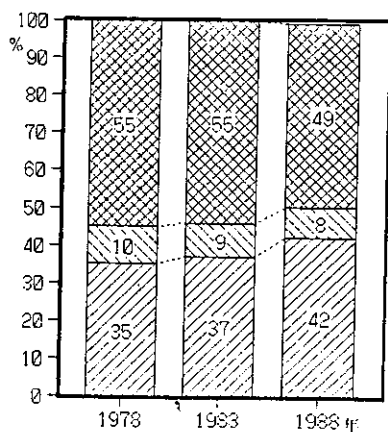
○自分なりに日本のために役に立ちたい（についてどう感じるか）

- ・そう思う
- ・そうは思わない

「そう思う」という回答は多数を占めているものの、ゆるやかに減少している（図2-8）。

図2-7 好きなことか人のためか

図2-8 日本のために役に立ちたいか



▨好きなこと ▨その他 ▨人のためになること

▨そう思う ▨わからない・無回答 ▨そうは思わない

(7) 秩序と個人の権利

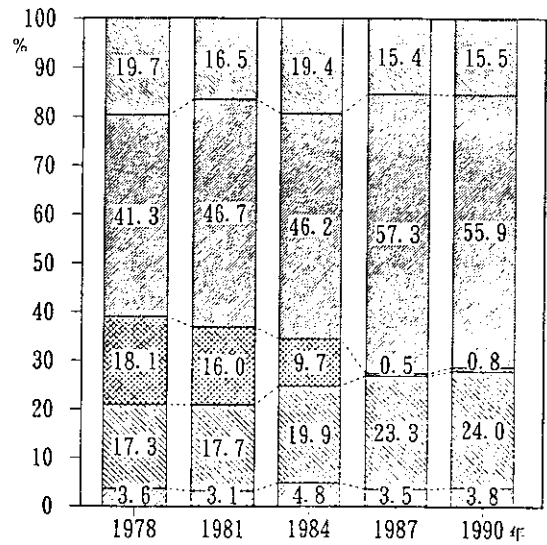
経済企画庁「国民生活選好度調査」では、「次にあげる意見や態度は、あなたの場合どの程度あてはまりますか」として、次の設問を行っている。

○多少秩序を乱すようなことになっても個人の意見や権利を優先させるのがよい

- ・全くそうである(全<sup>ク</sup>賛)
- ・どちらかといえばそうである(中<sup>中</sup>賛)
- ・どちらかといえばそうではない(中<sup>中</sup>反)
- ・全くそうではない(全<sup>ク</sup>反)

この設問については、個人対社会の軸よりは、「多少秩序を乱す」という、否定的であいまいなイメージを持っているため、質問文の意図が読み取りにくく、たとえ個人主義が主流となったとしてもこの設問に対しての賛成が多数になるとは言い切れないところである。また、87年から質問方法が面接法から留置法に変更されていることもあり、「わからない」という回答が極端に少なくなっているためか、「賛成」「反対」双方が増加しており、比較的安定したものとなっている(図2-9)。

図2-9 秩序と個人の権利



■ 全<sup>ク</sup>賛成 ■ やや賛成 ■ わからない ■ やや反対 ■ 全<sup>ク</sup>反対

(8) 社会と個人

総理府「社会意識に関する世論調査」に、次のような社会と個人に関する設問がある。

○国民は、「国や社会のことにもっと目を向けるべきだ」(国や社会)という意見と「個人生活の充実をもっと重視すべきだ」(個人生活)という意見がありますが、あなたのお考えは、このうちどちらに近いですか。 注)1980年以前は、多少表現が異なっている。

図2-10に経年変化を示す。ここには、「個人生活」への流れは見られず、ここ20年安定的に推移しており、ここまで見てきた調査とは異なっている。設問の文を読めば、それぞれの回答の中にある「もっと」という表現は、「国や社会」と「個人生活」のどちらにどの程度重点をおいているのかというよりは、「あなたがいまどちらに重点をおいているのかどうかはともかく、今後はどちらか」というニュアンスが感じられ、さらにこの双方の選択肢が、これまでの設問よりも対立点大きいものでないため、このような安定した傾向をもったものと解釈することができるだろう。こうしたことから、個人志向の時系列的变化をこの設問からつかむことは困難と言えよう。

参考までに、全体のうち「個人生活」を志向するものの比率から「国や社会」を志向するものの比率をマイナスして「個人志向スコア」を作成し、性別と年齢別に傾向を見ると

(図2-11)、男性より女性が高く、また男性では低年齢であるほどこのポイントは高く、前節(2)の「趣味にあった暮らし方」と同様の傾向が見られる。しかし、女性では年齢別の傾向ははっきりせず、86年から91年での変化が大きい。これは、社会情勢によって変化しやすい設問であるという側面を見せている

こうして、「国・社会・日本」と「個人」を比較した調査を見渡すと、設問による違いはあるが、決して強いものではないにせよ、広く社会的なものから広く個人的なものへの漠然とした方向が見受けられることは間違いない。前節(2)の「暮らし方」の回答もあわせて考えると、この傾向は1970年代には定着していたと読み取ることができる。

すなわち、社会との関係においては、個人を重視する傾向へと70年代に大きく変化し、その変化は現在も続いていると考えられる。そして、世代別に見ると、若い世代を中心にこの傾向が大きなものとなっている。

図2-10 社会と個人

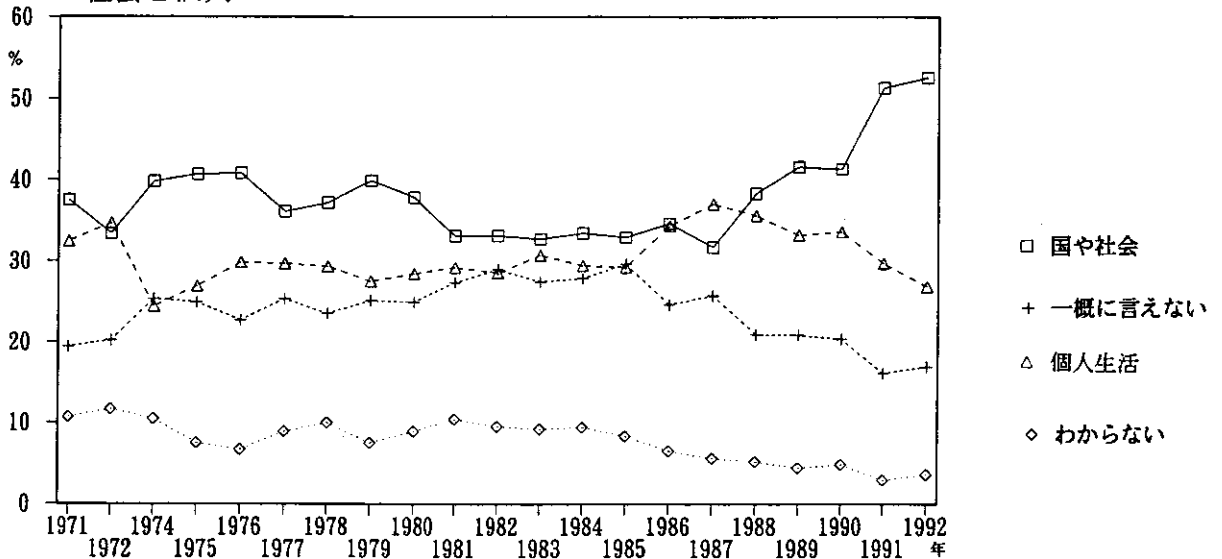
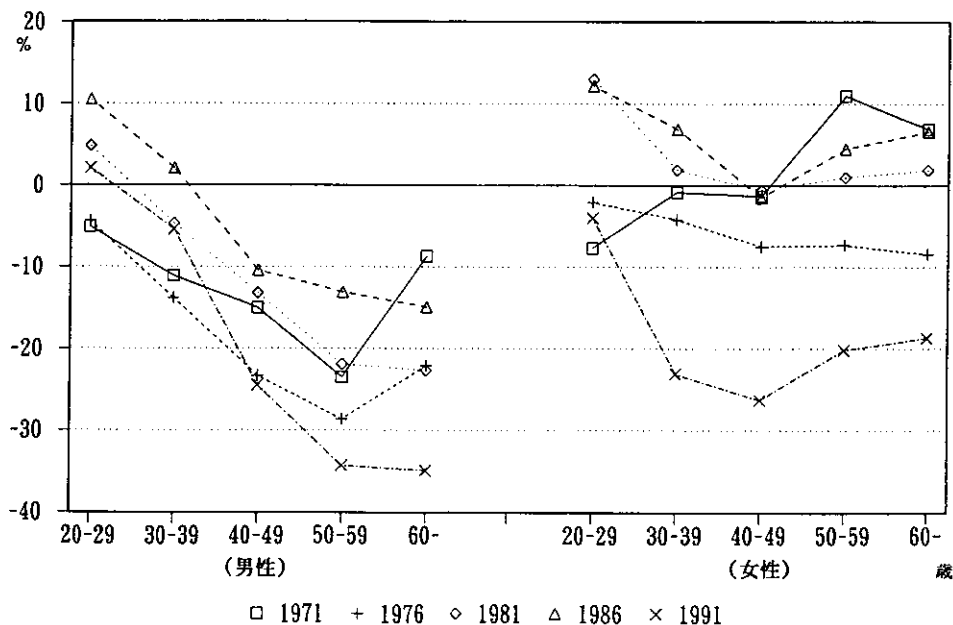


図2-11 社会と個人 (個人志向ポイント)





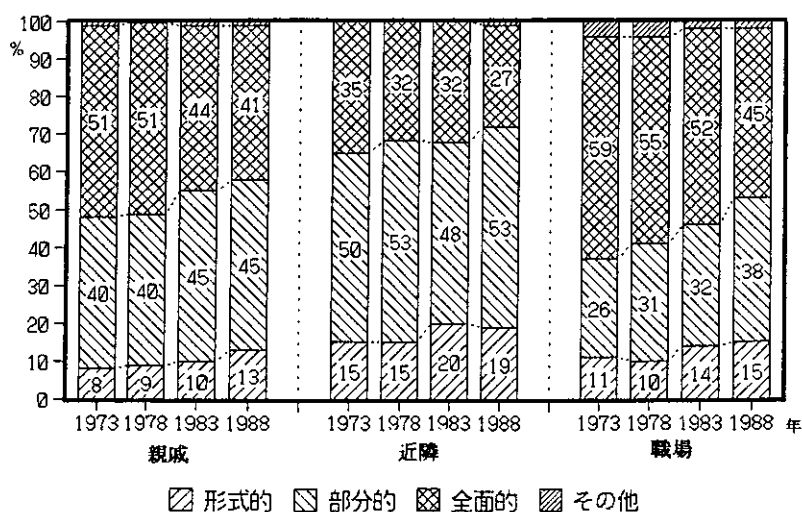
### 2.3 個人志向の推移：生活局面

以上、国や社会という範囲を対象とした個人志向の推移を検討したが、それ以外に目を転じるとどうであろうか。次章以降では、具体的な生活局面での意識を対象として分析を行っており、各章ごとにも触れることとなるが、ここではそれに先立って、日本人の意識調査において行われている、地域、職場、親戚の各場面における人間関係のあり方を見てみよう。

#### (9) 人間関係のあり方

- 親せきとは、どんなつき合いをするのが望ましいと思いますか。（親戚）
- ・一応の礼儀を尽くす程度のつき合い (形式的)
  - ・気軽に行き来できるようなつき合い (部分的)
  - ・なにかにつけ相談したり、助け合えるようなつき合い (全面的)
- リストには、隣近所のつき合いのしかたがのせてあります。あなたはどれが望ましいとお考えですか。実際にどのようにしているかは別にして、ご希望に近いものをお答えください。（近隣）
- ・会ったときに、あいさつする程度のつき合い (形式的)
  - ・あまり堅苦しくなく話し合えるようなつき合い (部分的)
  - ・なにかにつけ相談したり、助け合えるようなつき合い (全面的)
- 職場の同僚とは、どんなつき合いをするのが望ましいと思いますか。（職場）
- ・仕事に直接関係する範囲のつき合い (形式的)
  - ・仕事が終わってから、話し合ったり遊んだりするつき合い (部分的)
  - ・なにかにつけ相談したり、助け合えるようなつき合い (全面的)

図2-12 人間関係のあり方：3局面、時点別



この3つの局面での各回答の変化を1973年から88年にかけて見ると、程度の違いはあるものの、「形式的つき合い」と「部分的つき合い」の増加といった人間関係の希薄化が、一貫した傾向として見いだせる(図2-12)。さらに、この変化を生年別に見ると、「全面的つき合い」というものが、戦前生まれで、特に職場と親戚において、15年の間に減少しており、また、若い世代である48年以降生まれでは「部分的つき合い」を志向する割合が各局面で半数程度に達することが読み取れる(図2-13~15)。

そして、この部分的なつき合いへの移行は、視点を変えれば、上記の個人重視志向が、社会以外の他の局面にも及んでいることを意味しているのである。

図2-13 人間関係のあり方：親戚、生年別

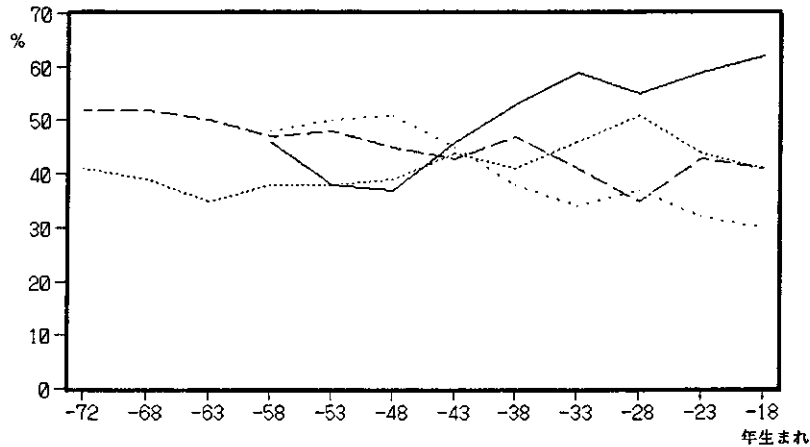


図2-14 人間関係のあり方：近隣、生年別

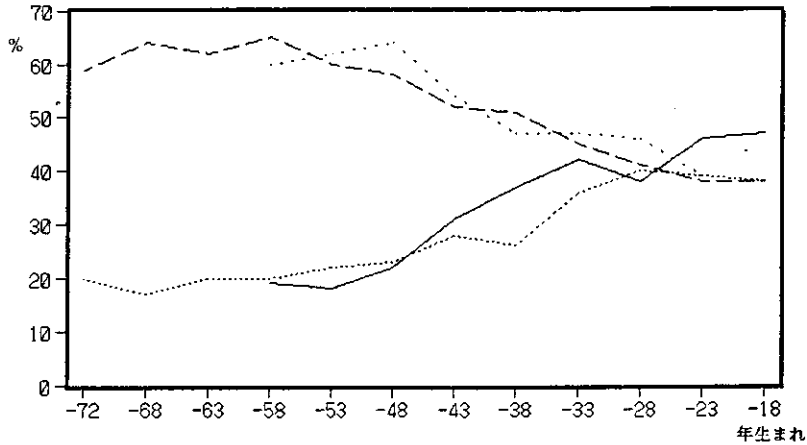
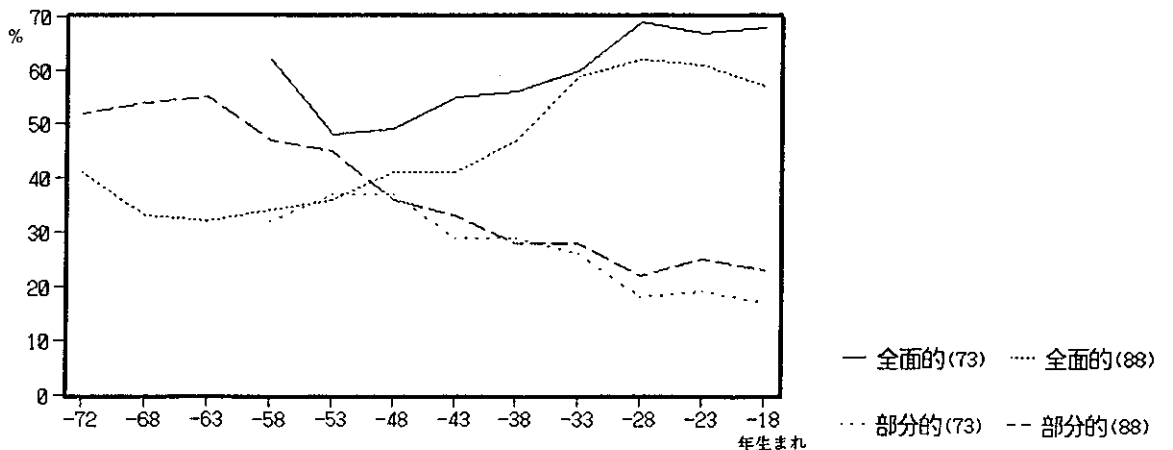


図2-15 人間関係のあり方：職場、生年別



## 2.4 個人志向：増加の背景

以上の設問からは、個人志向を表す選択肢がなかったり、個人志向的な回答が（文脈や状況のためか）少数意見であったりする場合もある。全体的な方向としては、意識は個人重視の方向に向かっていることが、国や社会との対比、さらに身の回りの各集団との関係において明らかとなった。

さて、この個人志向の増加にはいろいろな要因が考えられるが、そこで最も指摘すべき点は、これが日本の戦後の近代化による当然の帰結であるということである。

いわゆる近代化や産業化は、合理主義、能率重視、平等重視というものと密接に結びついている。日本ではこの近代化が、戦後の政治や教育体制の民主化、高度経済成長という形で顕著に行われてきた。そして、この合理的、平等といったものは、当然個人という単位での判断や行動にまで細分化されていく性質をもっており、日本の場合、都市化という近代化の側面が、戦後農村の共同体社会を崩し、共同体の成員ではない個人という存在を浮かび上がらせたのである。

一方で、近代化と個人主義を結びつけるものとは立場を異にする論もあり、日本は、欧米的な個人主義を持たない社会でありながら、なおかつ近代化を行ったという点が指摘されている。しかし、この論理でも、近代化により個人主義化することは直接は否定されているわけではない。近代化という切り口こそが、この個人主義の強まりを説明する要因としては最大のものと考えられる。

## 2.5 個人志向：内容

さて、これまでの検討では、個人志向の内容自体には踏み込まず、個人志向的な意見の変遷を見てきたが、次に、この増えてきた考え方がどのようなものかを検討していくこととしよう。

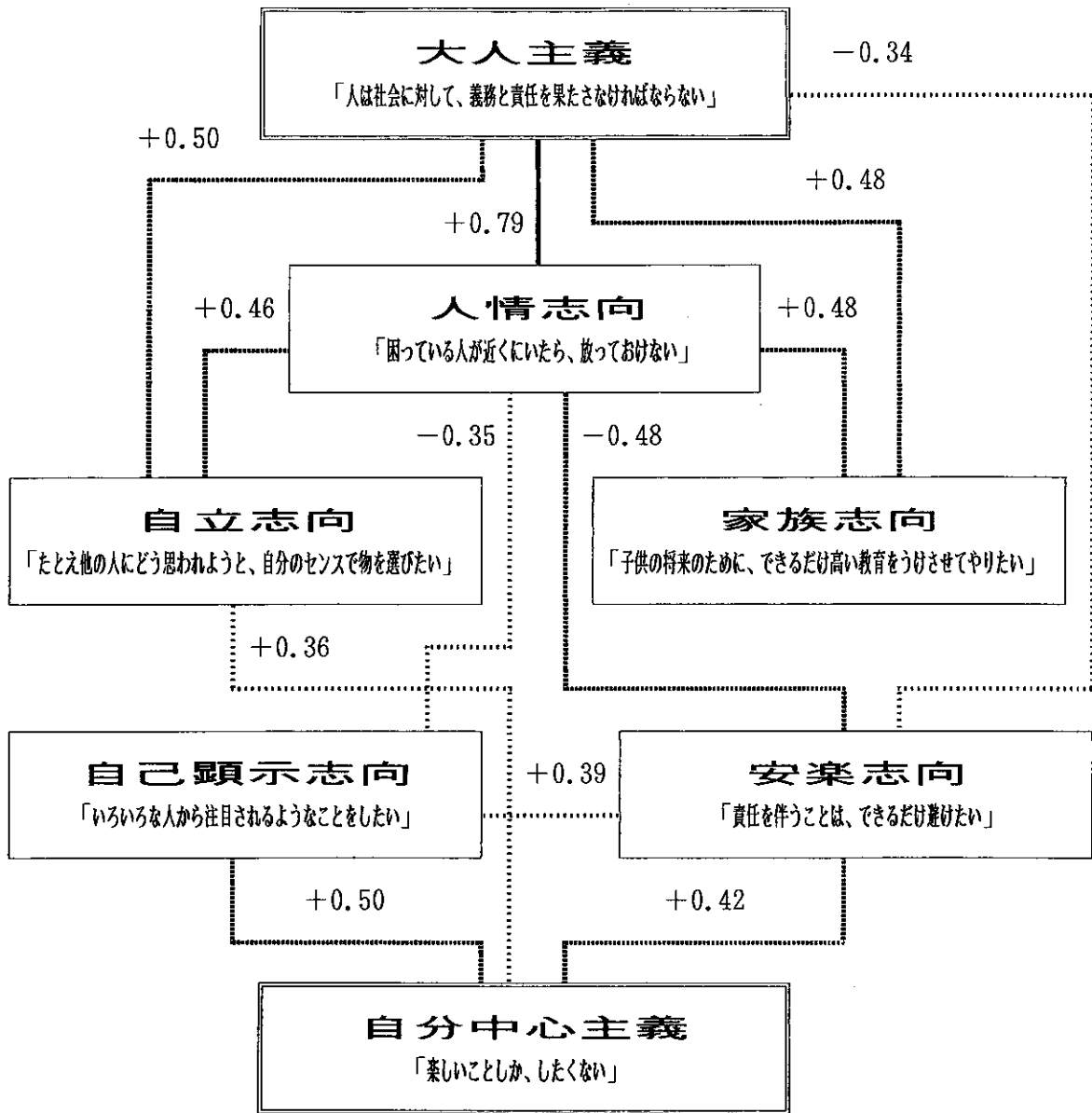
ここまでの各世論調査を見ている限りにおいては、この個人志向あるいは個人主義の内容まではわかりにくい。ここで参考となるのが、本章1節の生活価値観調査である。

この調査での価値観の全体構造は図2-16に示してあるが、このなかから、個人志向と関連を持つ分野を見てみると、二つの「主義」の下の階層を構成している「志向」のうち、「自立志向」「自己顕示志向」「安楽志向」という三つの志向が、個人主義に関係あるものとして注目される。

この志向の内容については、最も関連の強い意見をそれぞれの志向の下に書き添えてあるが、「自立志向」は、「既成の慣習やしきたりとらわれずに、自己の価値基準に基づいて判断を下し、責任をもって行動する」意識である。その一方、「安楽志向」は、「責任や苦勞を伴う仕事を避け、なるべく楽に暮らしたい」という姿勢とともに、「他者とのかわり合いを忌避し、一種利己的でクールな態度で望む」という面を示すものであり、「自己顕示志向」は、「他者を意識し、かつ自己実現にむけ積極的な意識をもっているもの」とこの調査では分析している。この「志向」と「主義」の関係は図からもはっきりわかるとおり、「自立志向」は、上位の価値観である「大人主義」と「自分中心主義」の両方との関連が強く、「自己顕示志向」と「安楽志向」は、「自分中心主義」と関連しているというように、その性質が異なっている。

こうした志向が抽出されていることを考えると、一般的に個人主義には、積極的な自立

図2-16 「日本人の生活価値観調査」で得られた価値観の相互関連



注) ——— 関係係数 0.6~  
 - - - - 関係係数 0.4~0.6未満  
 ..... 関係係数 0.3~0.4未満  
 +: 正の関連、-: 負の関連

「」内は、各々の価値観に対する因子負荷量の最も大きい意見を表す。

出所: 『日本人の生活価値観調査~1991』(財)生命保険文化センター、1992

図2-18 伝統対近代パタン分類：20～24歳、時点別

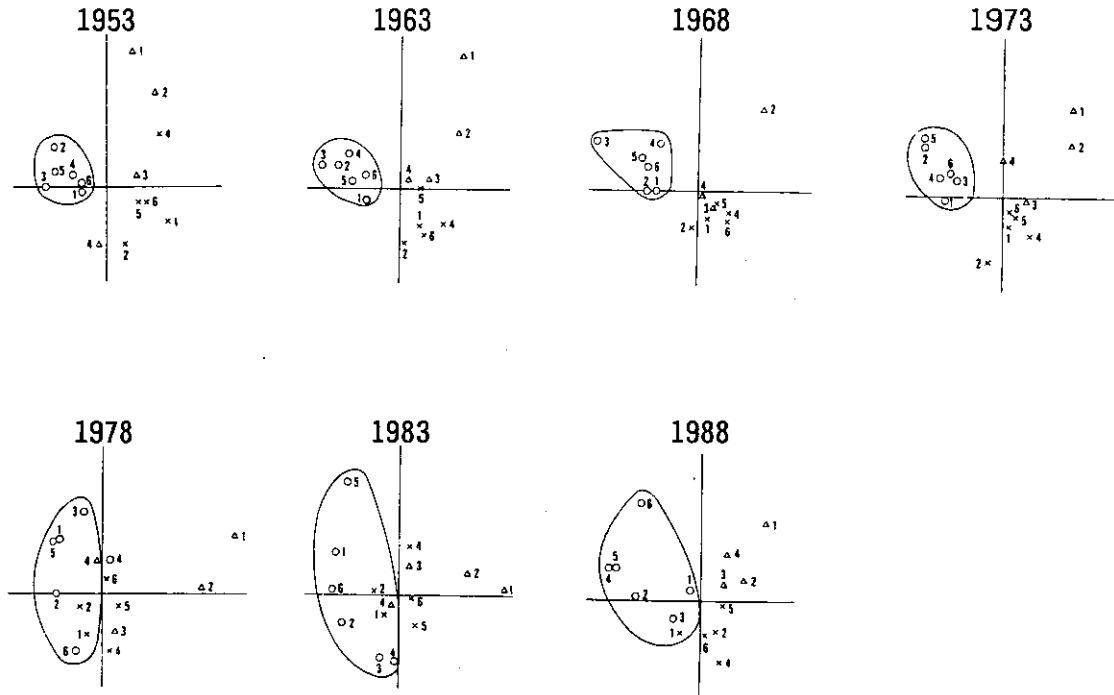
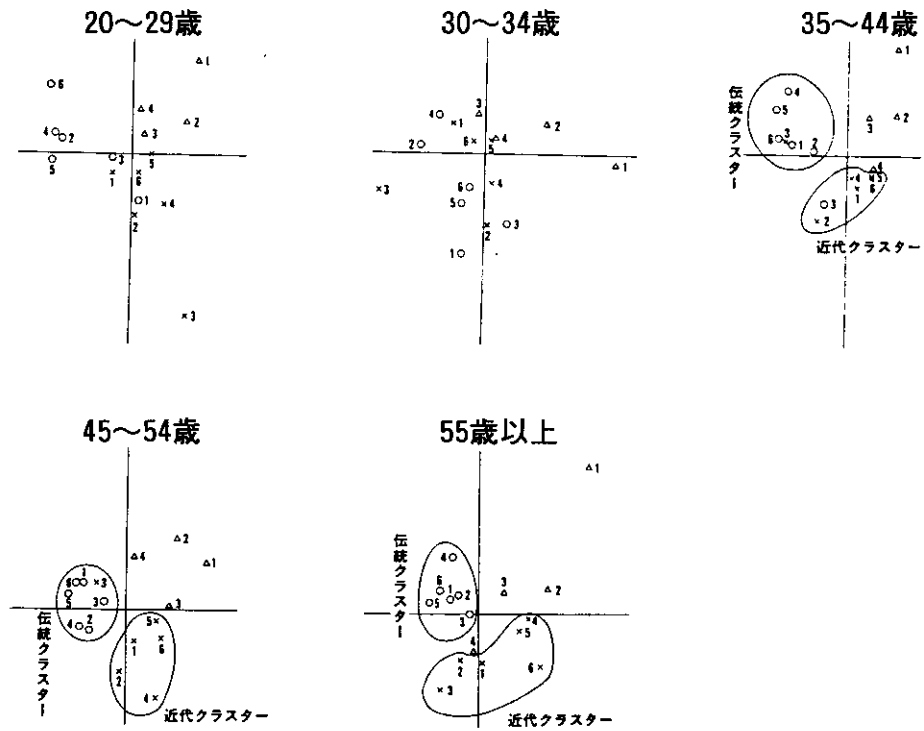


図2-19 伝統対近代パタン分類：88年調査、年齢別



## 2.8 補論：「情緒志向」の広まり

日本人の意識調査では、3つの場で、それぞれ能率や能力を重視するか、情緒や人柄を重視するかについての設問を行っている。

- 次のいずれかの人と組んで仕事をすると、その仕事はかなりむずかしく、しかも長期間にわたる場合、あなたはどちらの人を選びたいと思いますか。（仕事）
- ・多少つき合いにくい、能力のすぐれた人（能率）
  - ・多少能力は劣るが、人柄のよい人（情緒）
- 旅行のしかたとして、どちらがあなたの好みに合っていますか。費用や時間は二つとも同じくらいとして考えてみてください。（旅行）
- ・最大限に旅行を楽しめるように、あらかじめ計画を十分に練って旅行する（能率）
  - ・行く先々での気分やまわりの様子に応じて、気の向くままに旅行する（情緒）
- 地域に起きた問題を話し合うために、隣近所の人10人程度集まったとした場合、会合のすすめ方としては、どちらがよいと思いますか。（地域）
- ・むだな話を抜きにして、てきぱきと手ぎわよくみんなの意見をまとめる（能率）
  - ・世間話などをまじえながら、時間がかかってもなごやかに話をすすめる（情緒）
- 注）設問文は、内容が変わらない範囲で表現を省略・変更している。

1973年と88年を比較すると、各場面でわずかではあるが＜情緒＞の回答が増加している（図2-20）。各回答者毎に各質問の＜能率＞、＜情緒＞志向にそれぞれ+1点、-1点を与えてスコアを算出し、その結果が正なら＜能率＞、負ならば＜情緒＞志向としたものの全体に対する比率の動向を見ると、若年層の＜情緒＞志向の高さと、中堅世代の＜情緒＞志向の15年間での高まりが特徴的となっている（図2-21）。

こうした情緒的な志向の増加は、一見すると、本章で取り上げてきた、能率的な志向を持つ近代化とは異なる様相を呈している。そこで、日本人の意識調査では、もう一つの近代化の軸としての「権威・平等」という軸と、本章(3)での＜快＞＜利＞＜愛＞＜正＞の4つの生活目標とを交えて考察することによってその解釈を試みている。そこでは、女性については、すべての生活目標において＜能率かつ平等＞の志向が増加してきていることから、「近代化そのものの体現というべき平等・能率のパターンが女性を中心に新たな高まりをしめしている」として、近代化との関係を分析している。

図2-20 能率・情緒志向：場面別、時点別

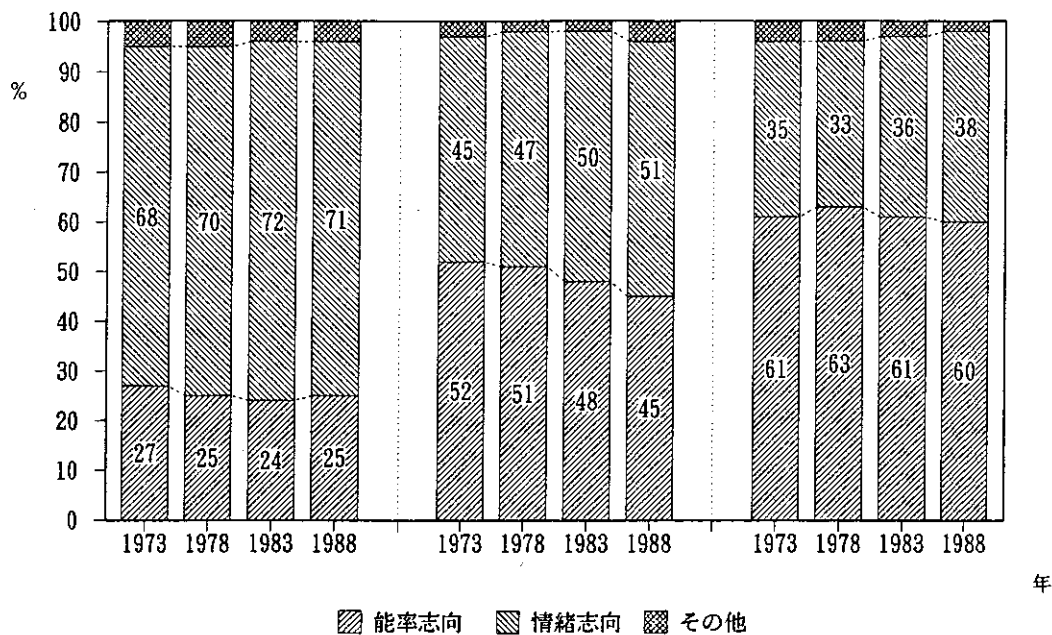
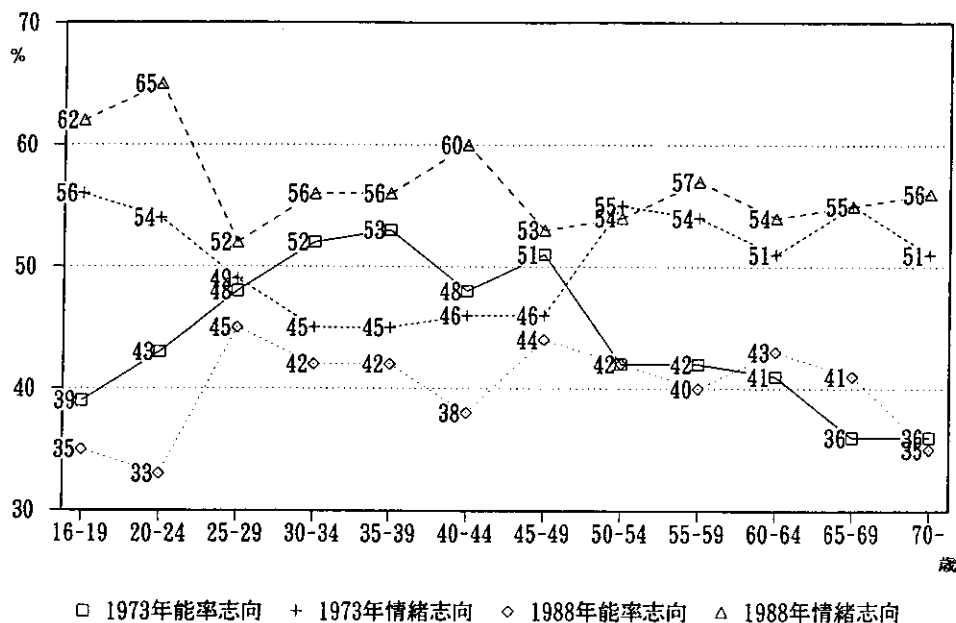


図2-21 能率・情緒スコア



この2つの分析は、「伝統対近代」という対立の図式が若者世代から順繰りになくなっていることと同時に、個人主義という近代化の必然の結果と情緒的な人間関係の増加というものが並立していることを示唆している。

以下、各個別の局面での意識を取り上げていくなかでは、本章での分析を基本的な認識として持ったうえで、進めていくこととする。

(2) 仕事と余暇

(1)は1980年までのものだったが、比較的最近のものとして、日本人の意識調査に、仕事と余暇を対比した設問がある。

○リストには、仕事と余暇のあり方について、色々な意見がのっています。あなたはどれがもっとも望ましいと思いますか。

- ・仕事よりも、余暇の中に生きがいを求める (余暇絶対)
- ・仕事はさっさとかたづけて、できるだけ余暇を楽しむ (余暇優先)
- ・仕事にも余暇にも、同じくらい力を入れる (両立)
- ・余暇も時には楽しむが、仕事のほうに力を注ぐ (仕事優先)
- ・仕事に生きがい求めて、全力を傾ける (仕事絶対)

1973年からの推移を見ると、「仕事優先」や「仕事絶対」は減少し、「両立」が一貫して増大している(図3-2)。図にはないが性別で見ると、やはり仕事とのつながりの強さからか、男性の方が仕事への志向は強いが、方向性の違いはない。男性について、増加傾向にある「両立」の動向を生年別に見ると、最近の生まれの世代になるほど強く、また1973年の調査以来、おおむね生年ごとに一定しており、あまり変化は見られない(図3-3)。

図3-2 仕事と余暇：時点別

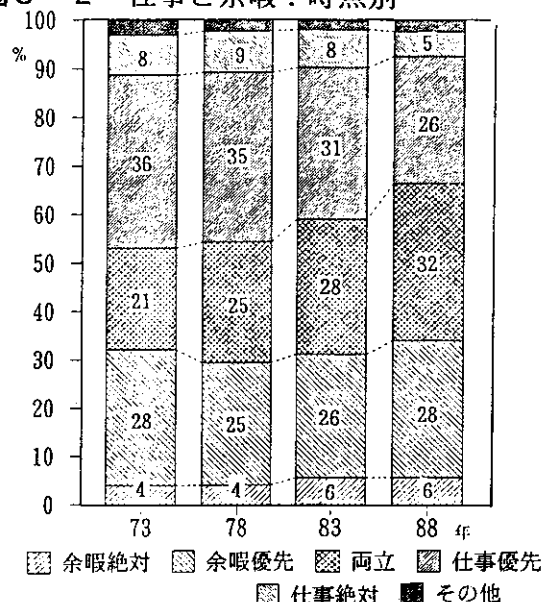
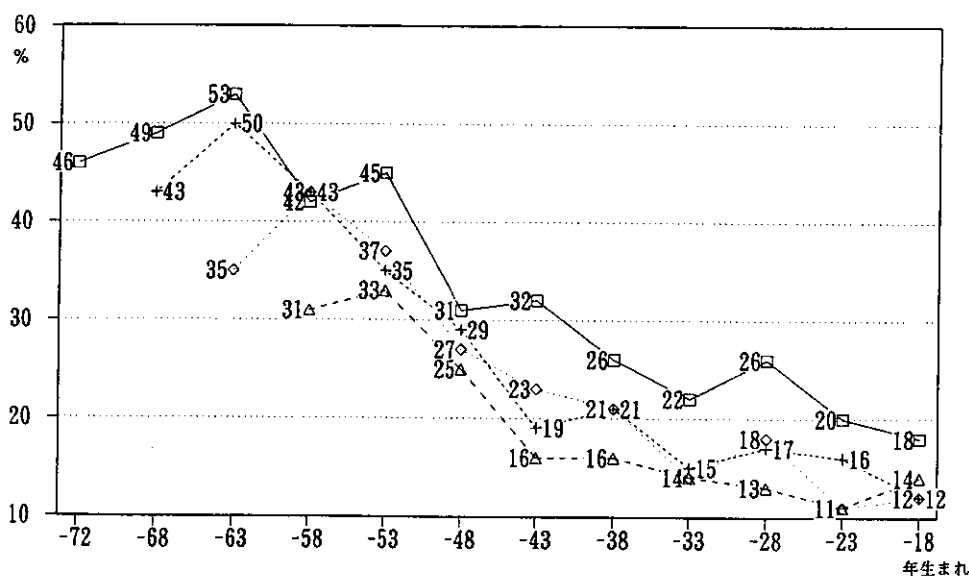


図3-3 仕事と余暇「両立」：男性、生年別



調査年： □ 1988 + 1983 ◇ 1978 △ 1973